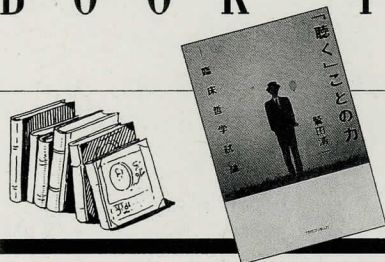


BOOK INFORMATION

対話をはじめのために



『『聴く』ことばの力—臨床哲学試論』 鷺田清一 著

TBSブリタニカ ¥2000+税

評/今橋映子

もしあなたが医者や看護婦で、一人の末期患者から「私はもうだめなんですか？」と問いかけられたら、どう答えるだろう。私も含めて多くの人は、「そんなこと言わないで、頑張ってくださいね」と、思わず励ましてしまうに違いない。鷺田氏は本書の冒頭でこの問いに対し、精神科医の多くが、「もうだめなんだ…とそんな気がするんですね」と返すことを紹介している。問いに対して必要なのは解答ではなく「あなたの言葉を受け止めました」という「応答」なのである。すると患者は安心して自分の不安を話し始め、それだけで悩みが解消することすらある。他者の前にあって、他者のことばを「聴く」こと、受け止めることが第一歩となる——かつてソクラテスが「産婆術」と、かくも見事に呼んでいた対人関係の根源的なあり方を、私たちはすっかり忘れてきたのではないだろうか。

モードや身体論など、これまでも新鮮な論考を世に問うてきた著者は、この最新論において「臨床哲学」という新たな学問領域を提唱し、従来最も「世間」とは遠いと思われてきた哲学的思考を、社会と直接リンクさせるといって、壮大にして「目から鱗」とも言うべき仕事に乗り出した。鷺田氏によれば、「哲学はこれまでしゃべりすぎていた」という。アカデミズムの枠内に留まり、分析し語るという知のあり方から、ひとが特定のだれかに出会うという〈臨床〉の場面を視野に収め、「聴く」ことをこととするようなあり方に転換しようとする試みである。

この著作の出発点に、阪神大震災における精神的ケアという未曾有の体験があることから分かるように、今、私たちは「ひとに対面する」という場に日々遭遇している。しかもその相手は、決してすぐには理解し得ない、あるいはそ

の苦しみを共有できない〈他者〉であるかもしれない。学校で日々接する生徒たちという最も身近な問題から、老人、障害者、末期患者、あるいは異民族の人々との困難な関係まで、〈私〉が〈他者〉と接する機会はあまりにも多い。〈臨床哲学〉は、そのような場を貫く、いわば倫理的態度として、「聴く」ことばの力を復権させようとする。語り、励まし、判断し、導くのではなく、相手を知り、その心に触れ、お互いに何かを伝え合おうとする精神——本書にはそうしたことについて考え続けた著者自身の思考の軌跡と、その思考に啓示を与えた数多くの哲学者たちの「ことば」が織り上げられている。しかも大切なのは、著者がこの本を、〈論文〉ではなく〈エッセイ〉として書いていたことだろう。フランス語 *essais* を起源とするこの言葉は、「〈試み〉としての省察」という、実は深い意味をもっている。読者は読み進むうちに、滋味深くしかも透徹した、すぐれた日本語の著作に出会ったよるこびをも、感じるに違いない。さらにこの書では、一貫して挿入されている植田正治氏の数々の写真も重要である。決してすぐに意味は分からない、しかしなぜか日常の文脈を離れた夢想を誘う写真の数々は、鷺田氏の言葉そのものを引き出したという。ここでの写真は「挿絵」ではなく、哲学のことばと付いたり離れたりしながら、独自の磁場をかたちづくっている。じっくりと読み、そして自分の問題として考え、引き受けるに足る一冊である。

◎いまはし えいこ……1961年東京生まれ。東京大学大学院助教授(比較文学・比較文化)。主な著書に『異都憧憬 日本人のパリ』(柏書房、サントリー学芸賞および沢沢・クロード特別賞)、『金子光晴 旅の形象』(平凡社)、『パリ・貧困と街路の詩学』(都市出版)など。